
曖昧で不確かな関係のふたり

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曖昧で不確かな関係のふたり

【Nコード】

N2048V

【作者名】

伊吹

【あらすじ】

切っても切れない縁だと思ってたんだけど…… 副題「たぶん」以前別サイトに投稿してたものを加筆修正したものです

いつ、どんなときも、どういう状況下でも、整った男だと思う。寝顔でさえも整っているなんて隙がない。

いつだったか、サークルの先輩が学園祭のミスコンにこいつをエントリーさせていた。

結果は、……言いたくもない。

その後しばらくは噂になったもんだ。

——あの美人は誰だ、と。

正体を告げるつもりなど微塵もなくせに一緒になってその噂を助長させるその言動に幾人もの男子生徒が振り回されたか。

その様子を見て、こいつは腹を抱えて笑っていた。

そのときの顔も、どこから見ても整っていた。きれいだった。

天は二物を与えず、なんてよく言うけどそれは嘘だ。

二物どころか三物四物……それ以上与えられた人間が、ここにいる。微かに寝息を立てて、他人の家のベッドを占領している。不法侵入だ！ と騒ぎ立てたところで、言いくるめられることは過去の経験上わかってる。

深いため息をついて、油まみれの身体を落とす為にバスルームに籠った。

爪の中にまで入り込んだオイルを丁寧に落とし、上がる頃には1Kの部屋においしそうな夕食——パエリア——が並べられている。魚介好きのあたしのツボを良く分かってる。

「宿代」

さつきまでベッドを占領していた男は、いつものようにその隙のな
い笑みを浮かべながら言った。手元はあたしに取り分けてくれる。
魚介類を多めにしている。

「どーしたのさ、えっと最近のあの子は……秘書課？ だっただけ？」

「いや、あの子じゃない。今日はいつもお昼に行く定食屋の娘さん。
なんか家の前に居た」

ストーリーカーじゃん、それ。

言いたいことを飲み込んで、そう、と一言。こいつの斜め前に座っ
ていただきますと手を合わせて、一口。相も変わらず美味い。

「あんた、最近頓に酷いんじゃない？」

「そうかな、」

「いい加減、女の子に勘違いさせるのやめなよ。大学じゃ上手く立
ち回ってたじゃん。どうして会社勤めになってから出来なくなるか
な」

この魚介と鶏肉のエキ스가染み込んだごはん美味しいし。あたしが
作ってもここまでうまくできないと思う。それどころか、何もない
平日に手の込んだものを作ろうと思わない。

帰りが遅いあたしは、毎日こまめに料理をしようと思わない。どう
しても手抜き料理になってしまふ。それこそ時間が掛からないパス
タとか。炒飯とか。

こいつが来てくれるとまあ、助かるっちゃ、助かるけど。

「——じゃないか」

「なに？ 何か言った？」

「いいや、何も。おいしい？」

「かなり。で、いつ帰るの？」

もう、終バス過ぎてると思うけど。そりゃ、タクシーという手もあ
るけど。今、お金貯めてると言ってたし、無駄遣いはしないはずだ。
「今日は帰りません」

整った顔が、あたしから目を逸らさずに箸を置く。つられるように、あたしも箸を止めて、猫の形をした箸置きに乗せた。

大学時代から住み続けているこのアパートは、少し手狭になってきた。女の子とのトラブルの匂いを敏感に察知するとあたしの家に転がり込む、こいつが次から次へと物を置いていくからだ。つて、そんなことはどうでもよくて。

「なんで？」

「もしかしたら、つて思ってたけど。ここまでとは。俺、泣きそう頂垂れ、拗ねた顔も隙がない。」

……… なんで、こいつはいつまでもあたしと一緒にいるんだろう。

「なんとなくでもいいんで感じ取ってほしいんですけどー」

「は？」

「もういいや、早く食べて。後片付けもするから」

それだけ言つて、やつはもくもくと食べ始めたから、あたしも仕方なく、ご飯を再開した。

夕食の後片付けをしたあとも、昔からこいつが見ている深夜のバラエティ番組を見終わつても、あたしがベッドにもぐりこむ時間になつても、こいつは帰る気配を見せない。

本当に、今日は帰らないつもりなんだろうか。一人暮らしのこの狭い部屋にもう一組布団を収納するスペースも敷くスペースもない。寝るところなんてないというのに、どうするつもりだろうか。

「あたしは寝るけど」

「うん」

「本当に、帰んないの？」

「うん、帰りません」

「………どこで寝んの？」

「そこ」

笑顔で、指差されても。

「あたしがここで寝るんですけど」

「知ってる。俺もそこ」

「いい、けど狭いじゃん」

「えー、突っ込むところ？」

「じゃあ、……あたしは女で、あんたは男だよね？」

「うんうん、そうそう」

や、なんでそんなに嬉しそうなの？

やつは勝手にシャワーを浴びて、ウチに置いてあったやつのシャツとジャージに着替えている。ていうか、ウチにそんなものあったわけ？

最近、女の子からのストーカー被害が多く、ウチの潜り込む頻度も高くなってるやつは、あたしの家なのに、物の収納場所もすべて把握している。

あたしが失くした、と思っていた物さえもやつの手に掛ければ、ああそれここにあったよ、と笑顔で言うくらいに。

「そうそうって、……いいの？」

「なあんか、お前ってポイント外すよな？ 狙ってんのそれ？」

「ん？」

「あのなあ、いいの？ って普通男が訊くもんだろ？ なしてお前が言うの」

深いため息、呆れた表情をして、脱力したやつはもう知らんっ！

とあたしを壁側に追いやってベッドに潜り込んでくる。

「あのね、俺は男女間の友情は信じない主義わけ。だから、お前が俺を仲のいい一番の男友だちって思っても、んなわけあるか！ と反旗を振りかざします」

「はあ……」

「あのなあ、お前のこの機械ばかり詰まってる脳みそはレンアイ

の入る余裕はないのか、「コラ」

「……ない、こともない、と思うけど」

恐る恐る発した言葉にあたしの頭をぐりぐりしていたこいつは、おっ？ とびっくりした目をしてその手を止めた。

だいが、近い距離だ。確かにこれは男友だちの距離ではない。

——ということとは？

「あれ？ ようやくわかった？」

「……………たぶん、」

(後書き)

今後シリーズものになる、予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048v/>

曖昧で不確かな関係のふたり

2011年10月1日09時44分発行